

# Angels' Voice

## 音楽の力②「聖歌は歌わなくてもいいの？」 神戸教区オルガニスト ミリアム 伊藤 純子

20代のころ通っていた教会で、テゼの会がありました。知らない人ばかりの集まりで、馴染みのない雰囲気、他人の目も気になり、居心地の悪さを感じながらも、私は恐る恐るその場に座っていました。電気を暗くして、さてこれからというときに、主宰の方が静かに仰いました。「これからみなさんと一緒に歌を歌います。でも、もし歌う気持ちにならないようなら、無理して歌わなくていいです。実際に声を出さなくても、この場に居て、この場の響きに身を委ねるといことが、すなわち、積極的な参加の形になります。」この言葉に、その時の私はどれほど救われたことでしょうか。

その言葉を聴いた後は、フワッと楽な気持ちで、その場の空気に安らげたことを、そして私の知らない歌の響きに気持ち良く包まれて温かな気持ちになっていけたことを、まるで昨日のことのように覚えています。その関連の会に出席したのはその一回だけでしたが、そのとき私は確かに、その場に生まれた音楽の力に交わることが出来ました。

その経験によって私は、実際に歌わなくても、「音楽の力」に積極的に参与することができるのだ！ということをもっと学んだのでした。

ルターは宗教改革の折に、それまでの礼拝形態に疑問を持ち、讃美歌というものを礼拝に取り入れました。それは、礼拝とは単に遠くから他人事のように「傍観」するものではなく、積極的に「参与」するものだ、そのためには皆と一緒に歌うことが効果的、との理由でした。つまり音楽の力によって、その場に集う会衆が心をつなげて、礼拝で今起きている事柄やその

日のテキストの内容を五感的に理解すれば、会衆が積極

的に礼拝に参加していることになるという見解です。

このルターの見解について、深く知ったのは最近のことです。これを知ったときに、真っ先に思い出したのが、冒頭に記した体験です。

音楽の力というものは、いかに礼拝にとって不可欠なものか、そして音楽の力は、実際に声に出さなくても、積極的に味わうことができる、ということです。

「聖歌伴奏」という言葉の表現は正しくないと、私の恩師が以前仰っていました。伴奏ではなく、歌との「アンサンブル」つまりオルガンは歌と一緒に共演をするのであり、オルガニストは歌との共演者です。

礼拝で音楽の力が思う存分発揮されるために、オルガニストにできることは、たくさんあります。聖歌伴奏で目指すことは、その聖歌が表現すべき世界観、空気感を、その場に誕生させて、共演者である会衆が、それを受け取れることではないでしょうか？実際に声に出して歌う会衆にとっても、声には出さずとも心の中で感じている会衆にとっても、会衆が何となく歌いたくなる伴奏、会衆が気持ちよく音楽の世界に入れるような伴奏が、理想的です。

そのためにオルガニストとしては具体的に、その聖歌の持つ「音楽の構成」「音楽の表情」をはっきりと表現することが必要で、そうすれば、「この聖歌を通して何を伝えたいのか」「この節では何を伝えたいのか」を明確にあらわすことができると思っています。

会衆にとって、聖歌アナウンスに続いて耳に入ってくる、聖歌の前奏を聴く時間は、今から歌うことになる聖歌の世界観を正確に感じ取

り、なおかつ、それを歌いたくなって（もしくは味わいたくなって）、ウズウズしてくるような時間であることが望ましいと思います。

聖歌を弾く時は緊張もしますし、音選びの事や周りのことなど、気になる点はたくさんあります。間違えてはいけない、ブレスはこうでなくてはならない、弾き方はこうでなくてはならない・・・などと、「いけない」ずくしで、決めつけてガンジガラメになってしまうのは、音楽の力は発揮されません。

私の立大時代、聖歌隊長に、礼拝直前のヴェストリーで「この聖歌のこの箇所は、どう弾くべき？」ときいたところ、「空の鳥や野の花が、どうして美しいか考えてごらん。」と応えられました。作為的に決めつけることによって、自然な歌いやすさから遠ざかってしまう、ということと言いたかったのでしょうか。頭が固くなっていた自分を反省し、音楽の力を自力で何とかしようとしていたことを、神様にお詫びしました。

もちろん、事前にあの手この手の策を練って、あちらこちらからの飽くなきアプローチを追求する作業を経て、音楽の力は誕生することになるのですが、最も大切なことは、音楽の力に身を委ねること、であるような気がしております。

## ～♪神戸教区のオルガン探訪♪～

### オルガンの恵みに感謝

牧師 司祭 バルナバ 瀬山 会治

米子聖ニコラス教会には、鳥取県でも稀なパイプオルガンが設置されています。捧げられる礼拝では、毎回素晴らしい音色で聖歌を歌うことができ、神戸教区でも恵まれた環境にあります。このような豊かな礼拝を捧げられる恵みも、伴奏をしてくださっているオルガニストの方々のご奉仕によるところが大きいと感謝しています。

教会では、春の聖霊降臨日近くと12月の教会記念日の年2回、コンサートを行い、宣教の働きとして幼稚園や地域の皆さんにも美しい音色を楽しんでいただいています。

\*\*\*\*\*

米子聖ニコラス教会には、教区と同じ英国製のオルガンがあり、オルガニストを中心に独自で礼拝音楽活動を展開しておられます。この度その様子を紹介して下さいました。塚田兄は元ピアノの調律師、渡英してオルガン調律を学ばれ、オルガンメンテナンスを担っておられます。

### 米子聖ニコラス教会のオルガン

モーセ 塚田 光俊

1991年、教会の移転に際し、新礼拝堂の広さでは今までのリードオルガンが機能しないことから、新たにパイプオルガンを設置することとなりました。

かつて神戸教区・四国の地方教会で師牧されていた宣教師で司祭の娘、グエン・ハーヴェイ(Gwen Harvey)姉(ウェールズ北Mold在住)が英国の若手オルガンビルダーを紹介して下さい、1991年当時の教会の信徒奉事者・高橋 巖師と伊神 努司祭、他1名が渡英して英国中央部のノッティンガムシャーのサウスウエル大聖堂内でオルガンの製作契約がなされました。その後ビルダー2名が当教会に来日して礼拝堂の図面等を持ち帰り製作が開始、1993年3月設置が完了しました。

オルガンを2階ギャラリー置くにあたり、予想外の作業が発生し、個人的に親しい友人・米子消防署の消防士ら6名に協力を依頼。彼らの熱心な奉仕なくしてオルガンの設置はできなかったことを忘れることができません。当時のお一人ひとりに感謝していますが、その中のお二人は、その後早くも天国に召され、現在の様子を見てもらえないのが誠に残念です。

当教会のパイプオルガンのデザインは、あのGeorg・Friedrich・Haendelが英国ロンドンでしばしば用いたオルガンをモデルにしており「ヘンデル・オルガンと言っても良い」とビルダーは誇らしげに紹介しています。調律はミントーンという古典的な方法で、馴染みの平均律調律とは異なりキーによっては不協和なところもありますが、内外のオルガニストには大変好評です。この工房の製作建造のオルガンは日本国内では現在唯一の楽器です。設置後毎年2度のオルガンコンサートを開催し、スウェーデ

ン、ヨーロッパ、また国内では立教大学聖歌隊指導者など、遠方からも演奏家を招き、地域の方々にオルガンを通して教会の紹介を行っています。また当教会5名のオルガニスト、それぞれが研鑽に励んでおられることは大変感謝です。

最後に、当時為替の円高が進み、ビルダーの意向により分割支払いになったため、最終的に契約時より額 300 万円の減額になったことも、神様の粋な計らいと感謝しています。

製作 M、ゲッツ & D、グウィン社(イギリス)

Martin Getze and Dominic Gwynn

設置 1993年3月

パイプ数 534本

Manual C—3

1, Open Diapason	8'
2, Stopped diapason	8'
3, Principal	4'
4, Flute	4'
5, Twelfth	2 2/3'
6, Fifteenth	2'
7, Tierce	1 3/5'
8, Mixture II	

Pedal C—f1

9, Bourdon	16'
------------	-----

M—P Mechanical action,  
Meantone temperament



40年近いオルガニスト、また幅広くご奉仕されているお二人の信徒の報告です。

### オルガニストから

マリア 井田 美智

子

マーガレット 住田 真理

子

約 25 年前イギリスで作成され、米子で組み立てられたパイプオルガンは、日本の湿気で下がったまま上がってこない鍵盤、強い不協和音、鳴らないペダルなどに悩まされ、最初の1年間はとても苦労しました。

1994年原田司祭の赴任を機会に、婦人の里香子姉と音大で同窓の松江プラバホールの専属オルガニスト・米山麻美氏によるレッスンがスタートしました。

鍵盤を押して風を送ってパイプを鳴らし、鍵盤から指を離す微妙な調整で音の消え方が変化する等、習えば習うほど難しい楽器です。また中世の調律なので、フラットやシャープが多いと響きが複雑になり、聖歌伴奏の音作りに苦労します。しかし聖堂の中に響く音は、神様の御手に包まれている様な癒しを与えてくれる魅力的なものです。

この温かい響きをたくさんの方に聞いていただきたいという思いから、教会主催で年2回無料のコンサートを開催、オルガニストによって様々な音色が響き、毎回大勢の方に楽しんで頂いています。



教会オルガニストも、バザーの日にはクラシック曲だけでなく親しみやすいポピュラー曲も織り交ぜたプログラムでミニコンサートを行い、演奏終了後には実際に見て触れ、オルガンを知っていただく機会も設けています。

教会オルガニストは現在5人(内信徒3人)、23年前に始めたレッスンはイースターとクリスマス前を含め、今も年に2~3回実施しています。

信徒のための聖歌練習は礼拝後に、また聖歌隊(約10数人、男女比ほぼ同じ)は昼食後に月2

回、次主日の聖歌を中心に練習しています。3月現在、チャントとイースターの陪餐奉唱曲を練習中ですが、クリスマスの子ども聖劇で歌う曲の練習は11月からスタートします。



若い信徒オルガニストが増えてほしいのが切実な課題ですが、併設する幼稚園の保護者や地域の方など、未信徒の方もオルガンや聖歌隊活動に参加されており、今後の宣教につながることを期待しています。

#### <レッスン報告>

##### ★教区レッスン

2017年12月(4人)

2018年1月(3人)、2月(4人)、3月(3人)

##### ★神戸聖ミカエル教会レッスン

12月、1月、2月、3月

##### ★松蔭中・高校オルガンレッスン

2月

#### <礼拝、行事報告>

##### ★神戸松蔭女子学院大学・1日研修

3月4日(日)礼拝奏楽を初めとする学生の奉仕グループ約30人が主日礼拝に参加。

午後～伊藤 純子氏のオルガンレッスンなどが行われた。

#### <礼拝、行事予定>

##### ★唱詠夕の礼拝

5月26日(土)17:00~(予定)

司式：坪井 智司祭

奉唱：教区聖歌隊

##### ★オルガン1日研修会・参加者募集

日時：6月23日(土)10:00~17:00

場所：神戸国際大学 諸聖徒礼拝堂

対象：教区内オルガニスト、一般信徒

講師：伊藤 純子氏(神戸教区オルガニスト、神戸国際大学オルガニスト)

内容：聖歌とチャント

参加費：実技受講¥2,000、聴講¥1,000

(実費昼食代、他含む)

申し込み：神戸教区事務所へMailかFax

E-mail: aao52850@syd.odn.ne.jp

Fax: (078)382-1095

響きのよい国際大チャペルで聖歌とチャントを学び、夕の礼拝を捧げます。親睦と交流のための茶話会もあります。詳細は近日中に各教会へ案内予定。

#### <訂正とお詫び>

前第9号3ページ <礼拝、行事報告>

司式：植松 誠 総裁主教 → 首座主教

に訂正し、お詫びいたします。

#### 【編集後記】

最近、足鍵盤の練習を本格的に始めましたが、右手、左手にプラス足も弾かなければならないとなると、本当に混乱してしまい、今までなら難なく弾けていた手鍵盤まで弾けなくなってしまいます。そんな私の練習を温かく見守ってくださる信徒の方々に感謝です。